

『日本の宣教の実態分析(北海道フォーカス)』

レスポナー 竿代照夫 (インマヌエル中目黒教会牧師)

「統計から見える日本宣教の実態と展望」(根田祥一氏)へのレスポンス

普段は小さな範囲で伝道し、小さな範囲でものを考えている私達普通の牧師にとって、(第二の報告者である花蘭氏と共に)マクロ的な視点からものを考える機会を与えてくださったことに、まず感謝申し上げたい。特に、それが地味で面倒な統計に基づいていることに敬意を表したい。結果として礼拝人数何人と何気なく報告されているその背後に、気が遠くなるような労が積み重ねられていることが推察されるからである。

報告者が、これらの統計を宣教という目的に絞って纏め、的確な解釈を加え、提言という形で前向きに用いられたことにも感謝申し上げたい。(牧師の側からの反省を込めて申し上げると、洪水のように押し寄せる調査依頼に、つい面倒であるという気持ちを持ち勝ちであった、ということ認めざるを得ない。今後は、もっと統計に関心を持ち、データの提供に協力的でなければならない、と思わされる。)報告者が提起された問題点について触れたい。統計が示しているのは、細部の事実もさることながら、圧倒的な伝道力不足という事実である。プロテスタント諸教会の総会員数が日本の人口の0.4%しか占めていないこと、その状況は好転していないばかりか、年を追って微減しているという大きな傾向の前に、私達は自らの乏しさを正直に認め、悔い改め、主の憐れみと助けを求めることから始めねばならないと思う。教会数が増えているのに、全体の会員数が増えていないことについて、報告者は、「教会数増の実態は必ずしも実質的な伝道の進展ばかりでなく、中には分裂・分派や、信徒が既成教会を離れて独自に「教会」を設立するなどのケースの影響も反映している可能性があるのかもしれない。」と分析しておられるが、これはほぼ実態を物語っていると思われる。

さらに報告者が、教会の開拓におけるアンバランスを論じられておられるが、開拓の責任を持つ立場の者には耳の痛い指摘である。報告者は、「教会の偏在(福音に触れるチャンスの地域間格差)の問題は、『すべての造られたものに福音を宣べ伝え』る大宣教命令の達成という使命のためには、ぜひとも克服すべき課題である。」と問題を提起しておられる。報告者はそこで指摘を止めておられるが、敢えて報告者の仰りたいことを私なりに言い表すと、「教会の教会開拓が、福音をすべての人々に広げるという宣教本来の目的に基づくというよりも、教勢拡張・教団の拡大といういわば教会の都合によって行われているのではないか。」という問題提起であろう。

報告者はさらに、教会偏在の問題を、「隠れ空白地帯」「教会希薄地帯」という視点で拡大鏡的に報告しておられる。報告者がさらに、これらの福音過疎地帯への教会協力的な取り組みを実例を挙げて提言しておられることも興味深い。

報告者が提起しておられる問題は、教会開拓におけるアンバランスの是正というような小さなものではなく、私達が何を目指して、何を動機にして伝道をし、教会を開拓しようとしているのかという深い問題のように思う。教会の頭である主を崇め、主の御国をこの日本に広げようという目標を諸教会・教団が共有する限り、教会開拓について、自分の属している教会(グループ)だけの都合やビジョンや政策ではなく、全体を睨みながら、相互間での情報交換が行われ、協力的なスピリットが生まれ、実践されるのではなかろうか。

日本経済新聞に堺屋太一氏が連載している「ジンギス・ハン」の中で、モンゴル族が行った壮大な「巻き狩り」が描写されている。広大な草原に縦横百キロ前後の長い包囲網を作り、それを三日がか

りで縮めて行き、獲物を洩らさずに獲得するという方法である。これは、獲物の獲得という直接的目的以上に、団結、連絡、協力という演習的効果があるとのことである。JEAに属している教会・教団が、このような意味での協力を行うという発想は「その本来の目的」から逸脱することになるであろうか。日本宣教という大きな視点に立って、教会が欠けているところを埋めていくという連帯的な大きな宣教戦略が必要ではなかろうか。消極的な言い方をすれば、教会が満ちすぎている場所での「開拓」は互いに遠慮するというのも「協力」の形ではなかろうか。パウロは、ローマ15：20において「私は、他人の土台の上に建てないように、キリストの御名がまだ語られていない所に福音を宣べ伝えることを切に求めたのです。」と語っているが、このような真の開拓精神が求められているように思う。また、良い意味での競争も全体の進展に貢献すれば、それも喜ぶ（ピリピ1：18）というパウロの寛容な姿勢も大切であろう。

さらに、牧師不足という現実はこの統計の中には現れていないが、牧師の年齢別統計を取れば、覆いようのない厳しい現実と思われる。この状況に鑑みて、「教会の統廃合」というテーマが不可避的なものとして浮かび上がってくるに違いない。その時が来てから、泥縄的な解決を行うのではなく、「災いを転じて福となす」的な発想をもって、今から教会協力の方向を語り合うことが大切ではなかろうか。

報告者が「・・・伝道団体と、・・・地域教会（教団・教派）とが、互いのメリットと機能の違いを認め合い、協力し合うパートナーシップを生かすことが、日本宣教の課題を乗り越えていくためのカギであると思われる。」として報告を締めくくっておられることを重く受け止めたい。

「C I Sのデータから見た日本の教会の現状」（花蘭征夫氏）へのレスポンス

報告者は礼拝出席人数の全国平均、地方別の平均値を示しておられる。さらに中間値（これは一番一般的な教会の姿という意味と思われる）を示しておられる。この統計的事実と解釈が問題なのであるが、「神が喜ばれるのは礼拝をささげる事であって人数には関係ない。また、神はギデオンの時代のように精鋭を用いなさる」という集約をしておられる。それは正に真理なのではあるが、もう一步進んで、この数字が意味する実際の問題を提起していただければもっと幸いであったと思う。

礼拝出席人数が教会の活会員の人数とほぼ同じであるとすると、平均値以下の教会の経済はどうなっているのか、伝道的な塊としてどのように機能しているのかいないのかを掘り下げることがひつようであろう。さらに、この統計で示された「大きな」少数の教会と、比較的「小さな」多くの教会との協力関係はどのようなものであるべきか、も大きなテーマである。これは、根田氏の報告へのレスポンスでも述べたように、教会の統廃合という動きは現実的か否か、という問題にも関わってくる。もっといえば、「日本における一教会のサイズ」に関する議論も、掘り下げねばならないだろう。諸外国の平均的教会像から見ると極めて小さい規模の日本のローカルチャーチのあり方を、居心地の良い、家庭的な交わりが出来て理想的と捉え、そうしたローカルチャーチを増やしていくことこそ、日本という土壌でクリスチャン人口を増やしていく道であると肯定的に考えることも出来よう。同時に、ある水準以下となって自給自立が出来なくなった場合の問題を考えると、克服すべき危機とも捉えられよう。

こうした問題点は、発題講演の中で触れてくださると思うが、ペーパーで拝見して考えさせられたので、敢て言及させていただいた。

根田氏、花蘭氏のご愛労に心から感謝致しつつ。